

晁補之之所藏與可畫竹三首 其一

晁補之ちやうほしが蔵する所の与可よかの画えがける竹に書す 三首

- 1 與可畫竹時 与可の竹を画く時
- 2 見竹不見人 竹を見て人を見ざりき
- 3 豈獨不見人 豈たに独ただ人を見ざるのみならんや
- 4 嗒然遺其身 嗒然とうぜんとして其の身を遺わする
- 5 其身與竹化 其の身竹と化かして
- 6 無窮出清新 無窮 清新を出いだせり
- 7 莊周世無有 莊周は世に有ること無し
- 8 誰知此疑神 誰か此の神しんに疑にたるを知らん



《墨竹圖》文同

【語釈】○元祐二年（一〇八七）五十二歳の作。蘇軾は前年からひきつづき都に在って、中書舎人および翰林学士となっていた。皇帝の勅書および親任官の辞令起草する職であり、この年には侍読の職を兼ね、幼い哲宗皇帝の教師でもあったわけである。○晁補之：（一〇五三〜一一一〇）字は無咎。鉅野（今の山東省鉅野県）の人。父の端友が杭州の官となった機会に蘇軾に面会し、文学の才を認められた。時に十七歳であった。以後蘇軾の門人となり、いわゆる蘇門四学士の一人。○文与可：（一一〇一〜一一〇七九）文同 字は与可。梓潼（四川省の県）の人。蘇軾とはいとこ同士。画家として知られるが詩人としても名があり、詩集「丹淵集」四十巻がある。「画は特に竹の画が有名。蘇軾のこの詩は文同の死後の作。これも題画詩。○嗒然：心うつろなさま。忘我の境地に達したさま。「莊子」（齊物論篇）○与竹化：竹と融合同化する。○無窮出清新：無窮の二字は出の副詞。清新を出だすこと窮り無しの意。○疑神「莊子」の『志を用いて分たざれば、乃ち神に凝す』（達生篇）のことばを用いたのであるが、この凝は疑と書くのが正しく、「志が純一であれば、鬼神かと疑われる」の意だという（王先謙「莊子集解」の説）。蘇軾のこの詩も凝神となっている本があるが、宋本は疑神であるのに従う。

【解釈】文与可が竹の画をかいている時には、目の中には竹だけが有り、人など見えもなかった。人が目にはいらないばかりか、自身の肉体さえすっかり忘れていたのだ。かれ自身が竹と一体になりきってしまった、新鮮な構図がかぎりなく現れてきた。莊周のごときすぐれた哲学者は今の世には決してない。とすれば、此の画の奥にある精神の純一を理解する人があるであろうか（それは鬼神かと疑われるほどである）。

其三

- 1 晁子拙生事 ちやうし せいじ せつ 晁子 生事に拙にして
- 2 擧家聞食粥 あ かつ 家を擧げ粥を食らうと聞く
- 3 朝來又絶倒 ちやうらい ぜつとう 朝來 又た絶倒す
- 4 諛墓得霜竹 ゆぼ 諛墓 霜竹を得たり
- 5 可憐先生盤 あわれ 憐む可し 先生の盤
- 6 朝日照苜蓿 ちやうじつ もくしゆく 朝日 苜蓿を照らす
- 7 吾詩固云爾 わが もと 吾詩 固より爾か云う
- 8 可使食無肉* な し 食に肉 無から使むべし

【通釈】晁さんは生計をたてるには拙くて、一家をあげて粥をすすっていられた。それが諛墓の文を書いて、霜竹の画幅を得られたと聞き、今朝ほどから、わたくしは笑いこらげてしまった。おきどくに晁先生の今朝の食膳のお皿には〔唐の東宮侍読薛令之そのままに〕うまごやしが盛られて、それを朝日が照らしている。もちろん、わたしが以前作った詩にはこううたってはいるんだが。「食事に肉がなくてもよいが、家に竹が無くてはならぬ」と。

*吾舊詩云 可使食無肉、不可使居無竹
吾が舊詩に云ふ食に肉無から使む可し 居に竹無から使む可からずと

【語釈】○拙生事：顔真卿の「李太保に与ふる帖」に「生事に拙にして、家を挙げて粥を食ふ」○絶倒：笑うにせよ、悲しむにせよ、およそ感情が極点に達して、外形にあふれ出ること。○諛墓：墓に諛（へつら）う。金をもらうためには筆を曲げても死者をほめそやした墓誌銘を書くこと。○盤：さら。○苜蓿：うまごやし。唐の薛令之は東宮侍読となったとき、自らその生活の貧寒なさまを悼む詩を作った。「朝日上りて团团たり、照らし見る先生の盤。盤中何んの有る所ぞ、苜蓿長じて闌干たり。…」○吾詩「於潜の僧緑筠軒」をさす。

書李世南所畫秋景二首其一（二〇八七年）

- 1 野水參差落漲痕 野水 參差として 漲痕 落つ
- 2 疏林敲倒出霜根 疏林 敲倒して 霜根を出だす
- 3 扁舟一棹歸何處 扁舟一棹 何の処にか歸る
- 4 家在江南黃葉村 家は 江南 黃葉の村に在り

【語釈】○元祐二年（一〇八七） 52歳、京師の官に在って作る。

○李世南：字は唐臣、安肅（河北省徐水県）の人。官は大理寺丞になり、画家で山水画に長じていた。○野水：野なかの流れ。○參差：ふぞろいなようす。ここは水がいくすじにも分かれて流れるさまか。○漲痕：水量が多いとき、つけるあと。○敲倒：傾き倒れる。○霜根：根は痕跡。○扁舟：小舟。扁は小さいの意は平声、平たいの意は去声。○櫂：棹、長いのを櫂。

【通釈】野中の流れは、気ままに流れて、水かさの多かつたときの痕跡を残している。まばらな林は、傾き倒れかかって、霜にいためられた跡もあらわである。

流れにさおさす一艘の舟が帰りゆくのはどこであろう。その家は、川の南、木々のもみじした村にある。

漢詩大系 蘇東坡 近藤光男より抄出